

---

# 魔法世界の陰陽師

おにぎり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法世界の陰陽師

### 【著者名】

おにぎり

N7290X

### 【あらすじ】

小さい頃から病気を患っていた俺は14歳で息を引き取った。闘病生活も終わつたしゆつくりしようと思つたが、神様土下座で俺転生!?憑依だろこんなの!!あれ、しかもこれネギま!じやん。シヤーマンキングの優しいver・ハオさんを目指しつつ、平和で優しい世界のために戦います。

## 平和をつくる者（前書き）

処女作です。ある程度のことは許して下さい。アドバイス待ってます。

## 平和をつくる者

うん、死んだな。病室で泣いて励ます両親がいる。

いや、もうこれはダメだろ。父さん、母さん、ごめんな。

白血病と診断されていた、小さい時から余り遊ぶ事は出来ず病弱だった俺は、両親が買つてくる漫画やアニメに没頭していた記憶があるのは今でも新しい。

『シャーマンキング』幽霊と協力して戦う王道バトル漫画だ。

登場人物も人柄に富んでいて、その中でも興味深い人物が「麻倉葉王」だった。

大人ふつているが実は子供みたいな性格、多分愛情が足りなかつたのだろう…。小さい頃から人を恨み、大きくなつては裏切られる。そんな人生が漫画の中とはいえ悲しかつた。

自分もこんな身体に生まれた事を神様に憎しみという形でしかぶつける事は出来なかつたのである。共感した部分があつたのかもれない。

――まあ今更どうでもいいか、今までありがとうございました父さん、母さん

すゞく眠たいな…。

目の前が暗くなり、光に包まれる。

「ん? まぶしい?」

目の前で初老の男性が土下座している。

「すまなかつた。 オーラン」

こんな人に謝られる事をした覚えはないんだが?

「とりあえず頭を上げてください、何があつたんですね?」

その爺さんは子供のような笑顔になつた。ハツキリ言つて気持ち悪い。  
い。爺の笑顔とか誰得だよ…。

「怒らないで聞いてくれる?」

「いや、まあ、事と次第によりますが…。」

「お主が幼少から病気にかかつたのは儂のせいなんじや。」

は?

老人は続ける

「儂の手違いで、お主を病氣にしてもうたんじや」

話を聞いていると

1・老人=神

2・雑務による疲れで手違い、俺白血病ヽ(×\_×)ヽ

もとから神様に見放されてたのか…。

「怒りんのか?」パクビク

「仕方ないでしょ!、わざとじやないですし。まあ、他人に被害が出なくて良かつたです。」

「わ、その、なんじや、お詫びと申つては難じやが転生してみんかの?」

「いやです、しばらくゆっくり休みたいです、闘病生活で疲れてます、誰かの責任で・す・が・ね!-!」

「すまぬ、すまぬのじやあーー。だがのひ、お主の様なこのひの手違にによる場合は、速やかに転生させねばならんのじや。」

「来世でもうくつしてくれんかの。お主の望みもくつなら叶えてやれ!」とも可能じや。」

「イツ、自分の仕事の為に俺を転生させようとしてないか?  
でも、まあ……

今まで自分の病弱のために両親が苦労したんだよなあ。そんな自分に、人が頭を下げているのに断る訳にはいかんよな……。

育てくれた両親なら笑顔で引き取れるだらうしな

「分かりました。転生しましょ!。」

「本当が一度々迷惑をかけてすまないの。」  
あつ、一応謝罪の気持ちはあつたんか……。

「で?どんなことに転生する事になるんですか?」

「ランダムじゃ！」

…。

「能力は何でもいいのですか？」

「ルールがあつての、2つの事柄は関連しなければならないしの、一つ目は人物像でなければならんのじゃ。」

「つまり、どういう事だつてばよ？」

「つまりの、の 太の容姿で、ジャ アンの力は使えんと言つわけじゃ。」

「人物像を元の自分の姿にすると、能力は2つ可能になります？」

「不可能じゃ。お主の存在が消えてしまったのでなあ。新しく設定する必要があるのじゃ。更にの、人物像で定めた者の肉体に左右されるため、それ以外はからつきしじや！」

あれ？縛り多くね？望み二つも叶わないじやんw

これ転生つてより、肉体の乗つ取りに近くね？

しかしながら、一度言つた手前もう退けないしな…

「分かりました。では の容姿で の能力をください。」

「じ、じゃが、それは無茶が過ぎんかのう…？」

「これくらいの融通はしてください。誰かのせいで引きこもつたのうえ、知識は殆ど無いに等しいんです。」

「さうか、やつはわれると仕方なしにじやのう。」

「じゃあ、行つてきます。」

「度々すまぬのう。基本はゼロの世界も平行世界じやから、好きにして構わぬでいいのはのう。」

再度俺は光に包まれ…

転生した

平和をつくる者（後書き）

不定期更新になる予定です。宜しくです。

## 大陰陽師——麻倉 葉王——

「イッテエ！」

尻餅をついたみたいだ。

マジかよ[冗談じやねえよ、何処だ]ここ?

見渡す限りの湖と、辺り一面は木、木、木。

水分が補給できるのは唯一の救いだろ？

まあ、結局ここが何処かも分かるはずはなく…。

「仕方ない、とりあえず能力確認からだな。」

立ち上がり湖に近づく俺。

湖に映るのは、あのゴキブリヘアーハーマントの少年、そう、あの大陸陰陽師だ。

今日この日、この瞬間をもって俺はハオになったのだ。  
感動をしつかりと噛み締めたところで、神様から貰った持靈、つまり能力なんだが会話とか出来るのかな？

『はい。主の仰せのままに。』

脳内に響くBBAボイス、なんて言ひか慈愛に満ちてる、うう、修道女?って言ひ感じかな…。

マジでこんな声なのかよ。

『え~と。初めてましてだね。俺の名前は麻倉葉王、ハオって呼んでくれるかい?』

『恐まりました、これより私、グレートスピリットは主をハオ様と

呼ばせて頂きます。』

俺が神様に恩着せがましい言い方をして、多少強引に手に入れた持  
靈はG・S・そう、全知全能の靈。

コイツは全ての魂の母体にして、帰還すべき場所、平たく言うと天  
国と地獄の合成体だ。

つまり、宇宙上の知識が全てあると言つても過言ではない。  
もちろん、そんなにホイホイ使うつもりはない、漫画のハオ自信も  
こいつを使って人類滅亡とか考えてたしな…。

俺自信も、こいつから最低限の知識を教えてもらひただけだ。  
多分、戦闘で使う事も殆ど無いだろう。

…まあ人が大勢死ぬ時、戦争を止めるとかじやないと使わないと思  
うぞ?

上の判断だけで一般人が大勢死んでしまう戦争みたいなのはおかし  
いと思うんだ…

『早速ですまんが、いくつか質問があるんだが大丈夫?』

『はい、何なりと』

『まず、ここは何処か分かるかい?』

『申し訳有りませんが不明です。私が存在していた世界とは別世界  
ですので、魂がコミュニケーションに戻らない限りはどうとも言えません。』

成る程なシャーマンキングの世界ではなさそうだな。

『次の質問だ、自分の寿命のコントロールは可能なのかどうかを教  
えて欲しい。』

『結論から言えば可能で御座います。ですが、私の知る限りの方法のみとなりますのでそれ以外、つまりデータ不足の場合。

例えばですが、ハオ様の記憶から引用すると、魔法や気功波などはまだ靈がコミューンに来ていないので蘇生が不可能となります。』

『じゃあ、蘇生不可能の場合で死んだらどうなる?』

『コミューンに靈が集まり、その理論が解明するまでは蘇生不可能です。集まり次第の蘇生になりますので、1年～1万年と期間は不明です。』

マジかよ、結構キツいかもな…。

『ありがとうございます、じゃあ最後の質問だ。五大精靈はどうなっている?』

『五大精靈は現在地獄コミューンにて、5体揃つております。ハオ様のご指示で、何時でも呼び出し可能ですが、もちろんそれ相応の巫力を消費しますのでご注意下さい。』

『分かつたよ、わざわざありがとう。もう戻つていいよ。』

『それでは失礼いたします。』

G・S・は消えたがこれかなりチート臭いな…。

ハオの巫力を持つてすれば、五大精靈 + G・S・の同時使用とかも夢じや無いんだよな。

うん、マジで自制しよう。

結構制限もあるから自由じゃないし。

人が死ぬ度、G・S・の知識が増えて、強くなるってキツいかも…。

人の死=この世界での自分の強さってさ…

とりあえず、街に出ないと始まらないし、森から出るとなると移動手段がなあ。

いや待てよ？今の俺は麻倉葉王なんだよな？

じゃあハオと言えば、G・S・の前にコイツだろ。

本当に出てくるかどうかドキドキしながら、空中の酸素に対象を絞り、巫力を籠める。

「よし！…出て来いスピリット・オブ・ファイア！…！」

全長約1200cmの赤い巨人が現れる。

いやいやデカ過ぎだろww

「『』めんなファイア、街に出たいんだ、足になつてくれるかい？」

ファイアが頷くと手を下げる來た。

それに飛び乗るとファイアが落ちないよう優しく包む。

丁度良いくらいの暖かさだ、原作じゃあ殺人の炎がこんなにも心地いい。

そんな事を考えてながら、今の持靈を使える楽しみを満喫しつつ俺は森を離れて行つた。

大陰陽師——麻倉 葉王——（後書き）

皆様お疲れ様です。

正直、ネギま！に優しいハオを突っ込んで、ネギのお兄さんにしてみたい。

と言つことで書き始めましたが、自分で書き始めると感情移入が出来なくなってしまい、妄想を書くようなものになってしまい申し訳ないです（、；；）

これからも頑張りますので応援して頂ければ幸いです。

「んにちは異世界、俺がハオだ。

「ありがと、ファイア」

近くに町が見えてきたので、郊外でファイアを消す。見られたら大変だしな。

いや、一般人には見えないだろうが、どんな世界か分からぬ以上は消しておくべきだろ？

平和で暮らせるのが一番だと思つんだ。

けれども、路銀が必要になる訳で……。

「まあいつか。町に着いてから考えよ。」

とか思つてたんだがな、目算間違つたかな？一時間位歩いたんだがまだ田的だは見えません（泣）。

外に出るのは生まれて初めてなんだから、よく分からんのです。

視界に入つて来たのは、西洋風の商店街。

歩き始めて3時間やつと着いたよ／＼。足が棒になるつていうこと事なんだうな。

とりあえず、門のようなところに座り寄りかかる。

「ふう～。着いた、着いた。」

まずは、じにじが何処なのかと、お金の稼ぎ方を考えようかな。

人に聞くのが一番早いんだけどね、14年間も引きこもり状態だった奴が人に聞ける訳がないんだよなあ。

とりあえず、ここでの通貨単位がドラクマといづれだけは分かった。

商店街で売ってる声が聞こえてくるしな。  
多分あつてるだろう。

『ハオ様、ドラクマは古代ギリシャでの通貨単位です。』

オオツ、流石G.S.だなWikki先生だろコレ。  
ん? ドラクマだと? つてことはもしかしてこの世界は…。

そんな思考の中、決め手となる商店街を闊歩する人間ではない生き物が目に飛び込む。

うん、多分これ「ネギま!」だな。  
間違いない。確定「ースだ。

だがしかし、ネギま!の世界となるとこれは相当ヤバい。  
氣も魔法もあるのはしゃれにならない、死ぬ可能性が格段に上がる。

まあ、路銀を稼ぐ方法はあったな。けどもさ、氣ノリはしないし、  
トラブルも嫌いなんだよ。

でも簡単に稼げるとなると、これしかないんだよなあ――――。

「さあ始まりました、グラニクス冬季大会ミネルヴァ杯。第一試合は西方は個人エントリーの新米少年拳闘士。対する東側は今回も優勝を攫つてしまつのか!? 魔族のミネリス、炎妖精ファイン!!！」

マントをフードのように被り顔も見せない少年に對峙するのは、人の体に馬の頭蓋骨に羊の角をつけたような魔族と、腕を炎化させながら入つてくる王様のような男。

「新人か、いい余興になりそうだな。いつちよ揉んでやるか。」

「ミネリス、私の手を煩わせるでないぞ?」

「分かつてゐよ、まあ少年楽しもつぜーーー！」

開始の合図とともにミネリスが地面に手をつける。

「ウオオラアアア、いつけエーーー！」

地面から出でくるのは骨の津波、敵を全て飲み込むような津波がマントの少年に襲い掛かるが跡形もなく燃え消えてしまう。

「焼かれた!? チイ、これならどうだ!!」

ミネリスと背後に槍のような大きな骨が5本浮かんでいる。「パキパキ」という音とともに、槍に螺旋状の模様が刻まれ高速で少年に投擲される。

が、これでもダメ、槍は少年にぶつかる前に燃やされる。

「ミネリス、敵は炎か、長丁場は厄介だ私も出よう一気に決める、氣を惹きつけておけ。」

「さつきと言つてること違えじやねーか、まあ仕方ねえな、まかせ

ておけ相棒。そういうことなら、出し惜しみは無しだ……」  
「らうだオラアアア。」

丸い玉のような大きな骨の塊が空中から落下してくる。  
逃げる隙など『えない巨大な塊…』

「弾けろオー！」

その一言ともに、空中で骨が弾け、鋭い骨片が雨のように少年を攻撃する。

おそらくこれは彼にとつては最高の技だらう。  
平原で放てば間違いないく地形は変わるであろうし、この『ロシアム』にも結界がなければ、闘技場自体に影響が出る次元の技だった。

しかし、その大量の骨片もあざ笑うかのように炎に包まれる。

「これでもダメとか、お前何者だ！？けどな、時間は稼がせてもらつたぜ。行けエ相棒！…」

「来たれ深遠の闇、燃え盛る大剣！！闇と影と憎悪と破壊、復讐の大焰！！我を焼け、彼を焼け、そなたは焼き尽くす者、『奈落の業火！！！』」

奈落の業火が少年を焼き尽くそうと迫る。そして少年は初めて言葉を口にした

「ちつちえな。」

ただ一言、たつた一言だった、その一言で会場の空気が変わる。と同時に奈落の業火は別の炎に呑まれ消えた。

いつからだらうか？フードが落ちた少年の後ろには大きな赤い巨人

がいた。

そして少年が続ける。

「最終通告です、棄権してくれませんか？手加減はできません。」

「棄権だと…？」ふざく「待てミネリス！！棄権だ棄権しよう。」何を言つて…

「私も自分の目を疑つたが、精霊であるがゆえに私には分かる。あれの巨人は、我々が神と崇めているあるうものに近いような存在だ、どんな炎攻撃も通用しない上、ただただ焼き尽くされるであろう。少年よ我々は棄権する。長くなつてしまなかつたな、失礼する。」

「オ、オイ待てよ！…ビビつてんじやねよファイン！！！…てめえもだ、まだ勝敗は決まってねーぞ！防御ばっかりの奴に棄権を促されて、ハイ、ソウデスカ。なんて言える訳ねーだろうが…せめて納得いく力を見せてみる。」

「燃やせ、スピリット・オブ・ファイア。」

嫌そうに少年が一言呟くと、コロシアムの結界が燃えた…いや、砕けたというべきか、会場を守る強固な結界を少年とその従者のような赤い巨人は呼吸をするように、結界を碎いた。

力の差は歴然だろう、それを悟った魔族もおとなしくなり、会場から退いていく。

そうして退場する一人を見つめる少年がただ一人闘技場に立ち続けていた。

SIDEOUT

## 「んたは異世界、俺がハオだ。」（後書き）

いやはや、何か主人公が別キャラみたって言つのは無しでお願いします。自分でも分かつてたんだ（・・・）

次話は会場でのハオの心情と、時間軸、新たな出会いについて書いてみたいと思ってます。

作者自信未熟なので文面アドバイス等、ドシドシ頂けると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7290x/>

---

魔法世界の陰陽師

2011年10月23日19時12分発行